

# インクル

第4号

財団法人 共用品推進機構

〒101-0064  
東京都千代田区猿樂町  
2-5-4 OGAビル 8階

"Incl." by The Kyoyo-Hin Foundation

## 目次 / Contents

- ・新春Kyoyo人鼎談 共用品・共用サービスと21世紀への夢を語ろう  
みんなで「新しい社会的価値」を創造しよう!(鴨志田厚子、富山幹太郎、星川安之)..... 2
- ・共用品推進機構ニュース..... 5
- ・依然として多い「家電製品への改善要望」  
『高齢者の家庭内での不便さ調査』まとまる(近藤和子)..... 6
- ・ルポ「ICカード乗車券」体験記 in 香港(荒井 聡)..... 9
- ・もっと日本からの情報発信を  
共用品国際動向調査委員、欧州を視察..... 11
- ・誌上再現「共用品が開く未来展&シンポジウム」..... 12
- ・ニュース&トピックス(ユーディット、INAX)..... 14
- ・キーワードで考える共用品講座  
第4講：共用品に関する文献(後藤芳一)..... 15
- ・『インクル』からのお願い..... 16

謹賀  
新年



(イラスト：牧内 智子)

新春 **Kyoyo** 人 **鼎談** 共用品・共用サービスと21世紀への夢を語ろう

# みんなで「新しい社会的価値」を創造しよう!

鴨志田 厚子・(財)共用品推進機構理事長

富山 幹太郎・同副理事長

星川 安之・同専務理事・事務局長

新たなるミレニアムの幕開け。財団として生まれ変わった共用品推進機構は2年目を迎える。誰もが楽しく、安心、快適に暮らせる21世紀のバリアフリー社会をどう実現していくか。鴨志田厚子、富山幹太郎、星川安之の3氏にお集まりいただき、今後の課題や目標、そして、わくわくするような夢を、熱く語り合ってもらった。

(構成・文・写真、高嶋 健夫)

## ISOによる国際標準づくりに、企業の強い関心

星川 明けましておめでとうございます。新春に当たって、共用品・共用サービスの未来について、大いに抱負や夢を語っていただきたいと思います。その前に、簡単に財団発足1年目の昨年の動きを振り返ってみたいのですが……。おおむね順調なスター



富山幹太郎(とみやま・かんとろう)さん

1954年東京生まれ。  
1982年7月英国ハル大学社会科学部卒業。(株トミーに入社。取締役社長室長、同副社長などを経て、1986年12月代表取締役社長に就任、現在に至る。  
(社)日本玩具国際見本市協会理事。

トを切れたのではないかと考えていますが、特に意義深かったこと、あるいは印象的だったことは?

富山 10大ニュースを選ぶなら、何でしょうか。

鴨志田 財団化したことは別とすれば、11月の「共用品が開く未来展」で発表・展示した「共用品推進特別賞」は意義深かった。グループ表彰というか、業界や団体を対象にした点がとても新鮮な切り口で、共用品・共用サービスの普及促進という意味で大変良かった。「未来展」も共用品の開発プロセスを解説したり、これから実用化するであろうハイテクを紹介した点で新鮮味を出せたのでは……。

星川 財団化に合わせて自主刊行した『共用品白書』はこれまでの経緯や諸資料・データをまとめた点で評価されている。それと、ISO(国際標準化機構)による共用品・共用サービスの統一基準づくりに、機構として参画できた。

鴨志田 共用品推進機構は唯一、オブザーバー参加が認められている。それというのも、共用品の推進役として認知されてのことと自負しているが、これはビッグニュースですよ。企業の関心はとて高く、機構への期待もその辺が一番ありそう、「情報がほしい」とか(笑い)。実際、機構になって、多くの有力企業が理事に名を連ねていただけたことは強力な支えになっている。

星川 年末には、国会(参院中小企業特別委員会)で共用品が議論された。これも画期的でしたね。

## 大事なものは、長く続けること

鴨志田 トミーさんが共用品に取り組むようになったきっかけについて、お話しください。

富山 そもそもは1986年にさかのぼります。80年



鴨志田厚子(かもしだ・あつこ)さん

1931年東京生まれ。  
1955年東京芸術大学美術学部卒業。静岡県工業試験場勤務を経て、  
1960年鴨志田デザイン事務所を開設。  
1991年E&Cプロジェクト設立、会長に就任。

に設置した、障害のある子供たちのための玩具を開発する「ハンディキャップトイ研究室」を、リストラの一環で廃止せざるを得なくなった際に、ここにいる星川君に「やめるなら、2度と看板を上げない覚悟でやめて下さい」と脅された(笑い)。彼の熱意にほだされて、「1人でもやるのなら残す。ただし、予算はない」ということにした。今から思うと、これが良かったのかも知れない。一生懸命、知恵を出していい仕事をたくさんしてくれた。

### 共用品の考え方は グローバル&ユニバーサル

星川 富山社長には、視覚障害のある子供たちのための「声の製品カタログ」に声優として出演してもらったこともある。

富山 「その方がマスコミに取り上げてもらえるから」とか、だまされて(笑い)。この頃から「小さな凸」の提案、盲導犬マークなど、現在に至る「共遊玩具」の活動が本格化した。そして、細くてもいいから長く続けていきたい、と考えるようになっていった。それには、トミー1社ではなく、玩具業界全体で、さらには国際的に、あるいは国内の他業界と一緒に取り組む必要がある。そうした考えから、共用品推進機構にも是非とも参加させていただこうということになったわけです。

星川 盲導犬マークの国際化の経緯は.....

富山 「ちょっとした配慮や工夫」という共用品の発想は、企業にとっても、とてもいいんですね。比較的少ないコスト負担で、お客様により喜んでいただける製品作りにつながるわけですから。そこで、日本での小さな凸の運動について、友人でもある欧米の大手玩具メーカー経営者に話したら、すぐに共感して、同じマークの採用に賛同してくれた。共用品の思想がグローバル、ユニバーサルに通じ、定着していったわけです。

鴨志田 「ちょっとした配慮と工夫」がキーワードですね。私はまさに、玩具業界から見れば他業界にいたわけですが、まあ、星川さんのパワーの賜物ですね、ここまで広がったのは。そのうち、シャンプー・リンス、テレホンカードなどの模範となる事例も現れてきた。

星川 仲間を広げやすいテーマではあった。ところで、財団化初年度の法人賛助会員は現在160口だが、社数では60社にとどまっている。

鴨志田 その点、準備時間が足りなかったのは否めない。会員拡大はこれからの大きな課題だ。

富山 もっと組織だって取り組む方法はないものだろうか。せっかくE&Cプロジェクトという一種のNPO(非営利組織)をベースにできた新しい発想の財団なのだから、個人会員の方々と法人会員、さら



星川安之(ほしかわ・やすゆき)さん

1957年東京生まれ。  
1980年自由学園最高学部卒業。同年(株)トミーに入社。  
1991年E&Cプロジェクトを設立し、事務局長に。  
現在、(株)トミー共用品推進室室長。

には理事・理事企業とが連携してもいいはずだが、まだバラバラという感じだ。理事会も、理事さんと個人会員のメンバーの方々が一緒に参画していくような形があってもいいと思う。

星川 ボランティアの意欲と理事の責任の合体化。これは確かに、大きなプロジェクトではある。

## 触って、試して、買える常設展示場を

鴨志田 事業としては、共用品の常設展示場の開設が課題。これはまだ「夢」のレベルかもしれないが……。そこに行けば、いろいろな共用品が展示してあり、専門の人に説明してもらえ、相談にも乗って



もらえる。もちろん、買うこともできる。国際交流や共用サービスに関する情報交換の拠点にもなる。そうした施設があると普及に弾みがつくのだが。星川 5年先という視点で、大きな夢を語るとすれば……。

富山 最大の課題は、「共用品推進機構の社会的価値を高めていくこと」に尽きる。企業であれば、売上高とか、利益とか、ブランド力とか、いろいろあるが、財団法人だと何だろう。共用品に関する明確な目標づくり、でしょうか。

鴨志田 おもしろい財団ですね、私たちは。先ほど富山さんがおっしゃられたように、E&Cプロジェクトという市民グループがあって、それをベースに生まれた。そんな特徴を活かして、バリアフリー、ユニバーサルデザインの基準のようなものを市民の立場から考えていく活動をしていければいいんだろうと思う。

## 産業界と消費者の一体化、国際的な人材づくり……

星川 ヨーロッパに「デザイン・フォー・オール」、アメリカに「ユニバーサルデザイン」、そして日本に「共用品・共用サービス」という考え方があって、いずれも目指すゴールは一緒と思う。その中では、

表 (財)共用品推進機構、この1年の歩み

### < 1999年の主な出来事 >

3月13日	設立総会
4月16日	財団設立認可
4月17日	E&Cプロジェクト卒業式
同日	共用品推進機構設立パーティー
5月15日	第1回東京会議
7月15日	機関誌『インクル』創刊
9月15日	朝日新聞に“共用品応援社説”
10月13日	国際福祉機器展に出展(～15日)
10月25日	「共用品推進特別賞」を選定・発表
11月5日	「共用品が開く未来展」開催(～8日)
11月8日	「共用品が開く未来シンポジウム」

### < 自主刊行物・報告書 >

- 『共用品白書 '99』(4月)
- 『高齢者の家庭内での不便さ調査報告書』(6月)
- 『弱視者の日常生活における不便さ調査』(2000年1月予定)

### < 書籍 >

- 『高齢者にわかりやすい駅のサイン計画』  
(都市文化社、7月)
- 『ドラえもんの車いすの本』(小学館、11月)

### < ビデオ >

- 『みんなで跳んだ』  
( (財)共用品推進機構 / 花王(株)情報作成センター、11月)

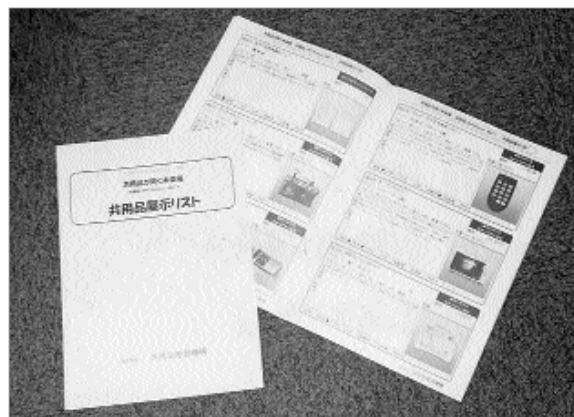
共用品推進機構ニュース

『共用品展示リスト』、好評発売中

昨年11月に東京・銀座のソニービルで開催した「共用品が開く未来展」に展示した77点の共用品の概要を収録した『共用品展示リスト』を好評発売中です。

これは共用品推進機構が独自編集したもので、各製品ごとに、製品名、メーカー名、価格、寸法・重量、概要・配慮点などを写真とともに掲載。視覚、聴覚、下肢、上肢、高齢者、妊産婦、左利きのどれに配慮したものが一目でわかるように、マークによる表示も付いています。巻末には、各社の問い合わせ先の部署名、電話番号、ファクス番号を一覧表にして載せています。

A4判、28ページ。頒価は1部300円（税込み、



送料別)。購入・問い合わせは共用品推進機構事務局（TEL03-5280-0020、FAX03-5280-2373）まで。

消費者サイドの機運がもっとも盛り上がっているのは日本だ、と外国の人から言われたことがある。

鴨志田 同時に、通産省はじめ国が「共用品の産業化」に力を入れている。この面でも日本が1歩リードしていると思う。

星川 国際的に通じる人材づくり。これも大きな課題ですね。

富山 国内、国外をうまくプロモートできる人材。

星川 最近、韓国のある大手企業の方が「ホームページで見た」といって事務局を訪ねて来られ、いろいろ聞かれていった。大変熱心で、こちらが驚くほど。共用品コンセプトの国際的な広がりを実感した。

富山 欧米に行くと、アマチュアの人が必要なコンベンションやセミナーなんかを主催して、そこに企業とか、プロの専門家を招いて、対等に議論している姿をよく目にする。日本でも、そんな活動がもっとあってもいいのではないかと。

星川 産業界と消費者の一体化ですか。機構の個人会員の多くも、高い専門性を持ったプロであり、同時に消費者でもある。いわば人気グループのスマップのように1人ひとりが個性的で多様な顔を持つ高度な職能集団なわけだし、もっともっと力を引き出せるはずですよ。

富山 消費者、ユーザーの創造性、クリエイティビティには凄いものがある。我々メーカーもある意味で及びもつかない面があるわけですし、そうしたパワーをもっと表に出せると良いのですが。

星川 そうした「場」の提供、「場づくり」が機構の役目かも知れない。

個人にも、企業にも、  
カッコイイ活動に！

富山 こうした活動に参加していることがカッコイイ、という意識が広がってほしい。

星川 個人も、企業もカッコイイ。確かにそうありたい。それには、やはり、機構の価値を高めるしかないですね。

鴨志田 よそではできないことをやる。それが価値ですね。それを見つけないといけない。

星川 幸い、「共用品・共用サービス」というテーマはとて素晴らしいと、自信を持って言える。後は、方向性をどう整理していくか。

富山 今年は「21世紀の扉を開ける前に準備を整える年」だと思う。21世紀の共用品をしっかりと見定めた活動を是非していきたいものです。

星川 今日はどうもありがとうございました。

# 依然として高い「家電製品への改善要望」

## 『高齢者の家庭内での不便さ調査』まとまる

こんどう かずこ  
近藤 和子 (個人賛助会員、商品開発・生活研究コーディネーター)

(財)共用品推進機構による『高齢者の家庭内での不便さ調査報告書～家庭内の危険、事故をなくすために～』がまとまった。全労済助成事業として、前身であるE&Cプロジェクト時代から調査を行ってきたもので、高齢者関係の不便さ調査としては『高齢者の交通機関とその周辺での不便さ調査報告書』(96年)に続く第2弾となる。同報告書の概要を、共用品推進機構・東京会議高齢者班班長の近藤和子さんに紹介してもらった。

### 高齢者に対する理解を深める契機に

わが国の超高齢社会の到来は急速で、社会的な施設や住まいなどの利用面での不便さや高齢者が自立できなくなった場合の介護の問題など、高齢者自身はもちろん、その家族の不安も大きい。2015年には65歳以上の高齢者が日本の全人口の4分の1になると予想されているが、一般には高齢者に対する理解はまだ十分とはいえない。

高齢者といっても、介護を必要とする人はその1割程度で、なんとか元気に生活をしている人が多いのだが、病気による後遺症などの障害を持つようになる人も少なくない。

そこで、今回の調査では、家庭内での生活で生じている不具合点を明らかにし、その問題の改善の方向を探ることを主な目的とした。さらに、家庭内で起こりやすい高齢者の事故やその危険についても調べ、高齢者が他の家族らとともに安全で快い生活が続けられるための改善点をも見いだそうとした。

調査は98年7月～99年4月にかけて、アンケート調査とグループインタビューの2本立てで行った。アンケート調査の対象は、首都圏を中心とする65歳以上の高齢者210名(男性84名、女性126名)。さらに、比較対照するために、40歳以上の成人124名にも同じ調査を実施した。一方、グループインタビュ

ーは、各6、7名ずつ4グループ26名(男性8名、女性18名)に実施した。

### 8割は何らかの病気持ち、持病には男女差

まず、健康に対する自己評価を見ると、自ら健康という人は、74歳までの前期高齢者では48%、75歳以上の後期高齢者は27%と、加齢により健康と言い切る自信は低下していた。

高齢者の約8割は何らかの病気を持っていたが、持病の種類については男女差が見られた。女性は膝関節痛が男性の2倍以上で約16%と多い。後期高齢者に増加が見られたのは白内障で、74歳以下と比べ3.5倍の約28%と多くなっている。聴力の衰えは約3割の高齢者が「普通の話し声が聞きにくくなった」と自認している。

### 不便なのは家電品、容器開封、高い所の掃除……

朝起きてから夜寝るまで日常生活を通じて、高齢者が不便さを感じていた第1位は「家電品の機能が多すぎてわかりにくい」ことで、約3割である。まだ家事を主にならしている前期高齢者では約33%とより高い。

第2位は「加工食品のピン、缶、その他のバック容器の開封のしにくさ」で、全体で約25%であったが、なかでも女性の方が約3割と高かった。

第3位は「掃除機が重い、高いところが掃除しにくい」で、全体では約24%だったが、女性は約3割と高かった。続けて、布団干しや上げ下ろしが大変になる様子が見られた。

次に、毎日の生活で思いがけない問題が見られたのは「トイレ、浴室、洗面所が、冬、寒い」ことで、特に男性で寒さを感じている人が女性に比べて格段に多かった。トイレは女性が1.6%に対し、男性は

図1 洗面所の不便さ[ 男女別 ]

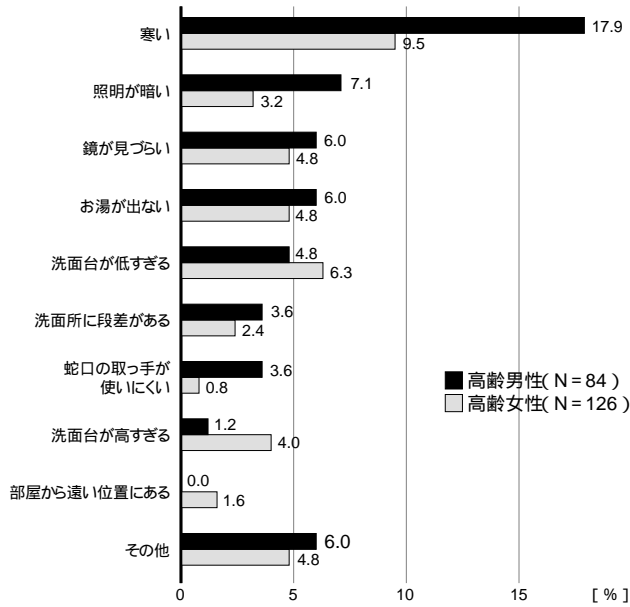


図2 台所での不便さ[ 年齢別 ]

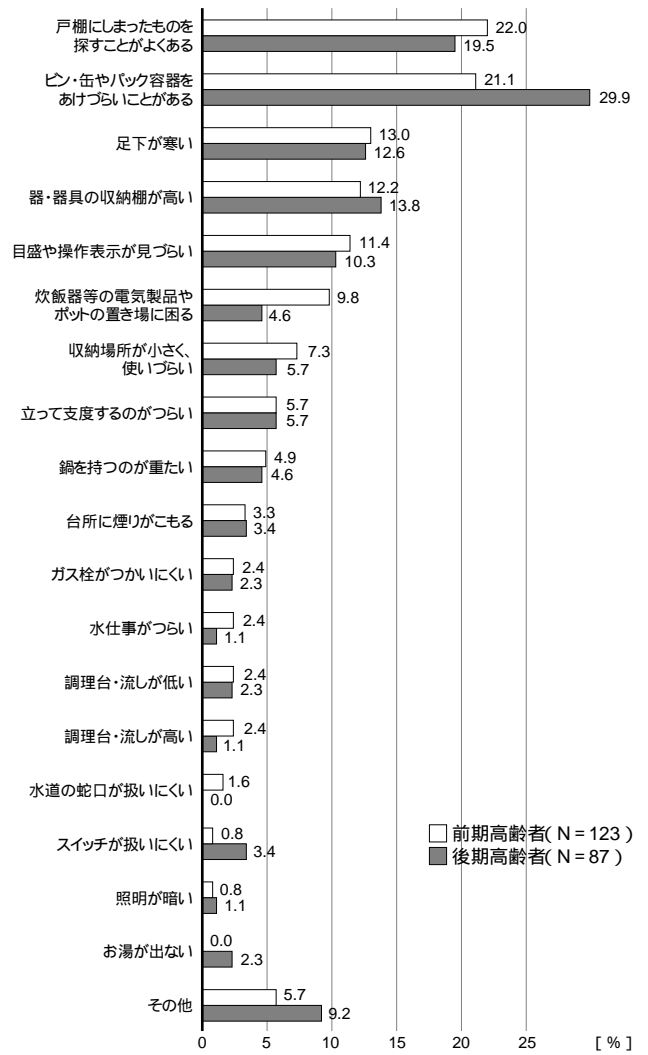


図3 トイレの不便さ[ 男女別 ]

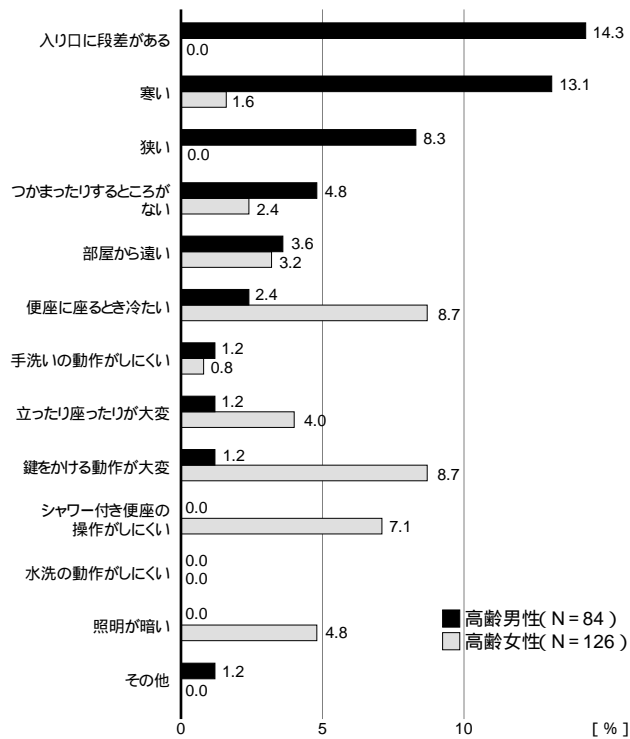


図5 浴室で危ないと思ったこと[ 年齢別 ]

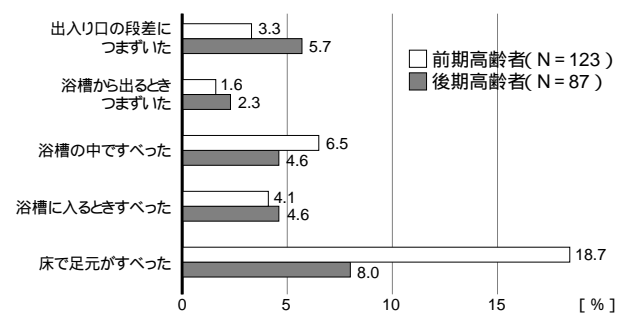


図4 浴室の不便さ[ 年齢別 ]

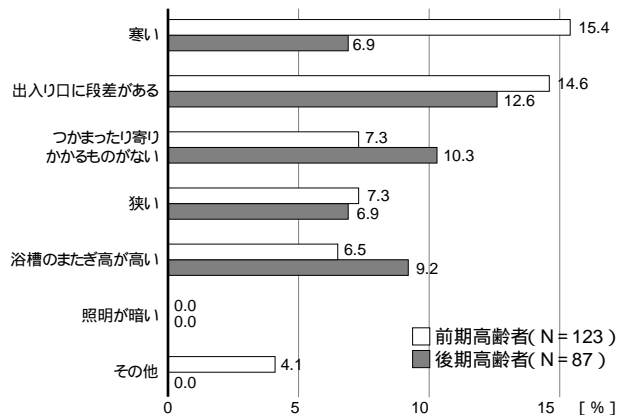
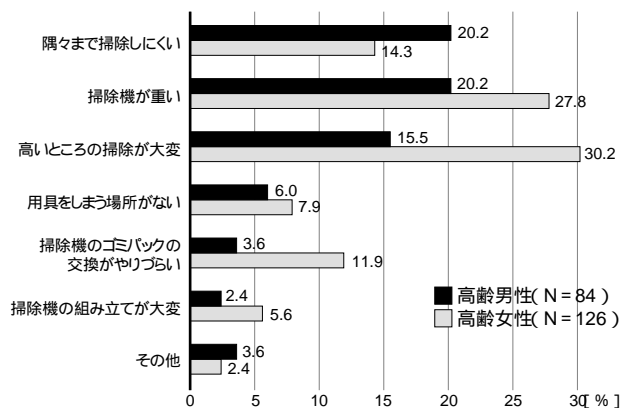


図6 掃除の不便さ[ 男女別 ]



13.1%、洗面所は女性9.5%に対し、男性17.9%となっている。なお、洗面所ですでに暖房器具を使用している人は約2割見られた。

家の中での移動では、階段でけがをしたり、危険を感じている人は多く、「手すりがない」不安が見られ、浴室や玄関では「手すり」などつかまる所が求められている。また、寝室からトイレが遠いことを約25%の人があげているのが目立った。

### 女性に断然多い 「家庭内での事故」

洗面台や調理台の作業面、収納の吊り戸棚や物干しなどの高さ、浴槽のまたぎ高の不適を理由とする危険性や不便さは、女性に多く見られた。

家庭内での事故については、出現率は女性の高齢者の方が断然多く、女性の19%に対し、男性は4%となっている。「ひやとした経験」も同傾向で、家庭内の事故は女性の方が多く、グループインタビューではさらにその様子が浮き彫りにされた。高齢者の作業の中での事故に関する問題は「忘れる」「うっかりする」「瞬発力がなくなる」「滑る」などによる、高齢になったための事故の原因、危険が潜んでいた。家の中での1位は台所であった。

今後、家庭で使用する製品、住まいの構造、設備、用具の開発や見直しをするには、使い手である高齢者の身体機能、行動面の特性からのニーズを正しく捉える必要がある。いままでは、高齢者の不便さなど知る機会がなかった「若い男性の視点での商品づくり」が多かったと考えられるからである。

これからは、高齢者専用品の必要性が高まる一方で、障害のある人にも、健康な人にも受け入れられるような共用品・共用サービスへの開発や手直しへの期待が高まるのは確かである。高齢者が使いやすいモノは、中年の世代の不便さも解消し、大きく受け入れられることであろう。

なお、同調査報告書は1部1200円(税込み、送料別)で頒布している。申し込み・問い合わせは、共用品推進機構事務局(TEL 03-5280-0020、FAX 03-5280-2373)まで。

図7 電気製品の不便さ[男女別]

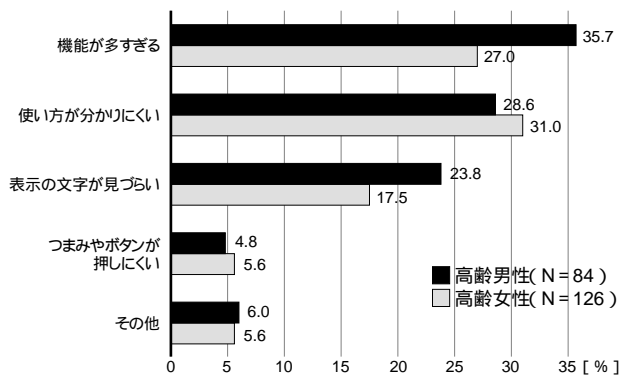


図8 階段での不便さ[年齢別]

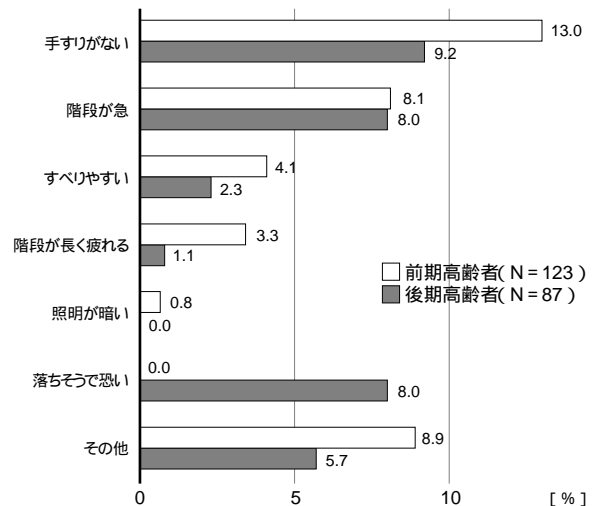


図9 夜間トイレに行くときの不便さ[男女別]

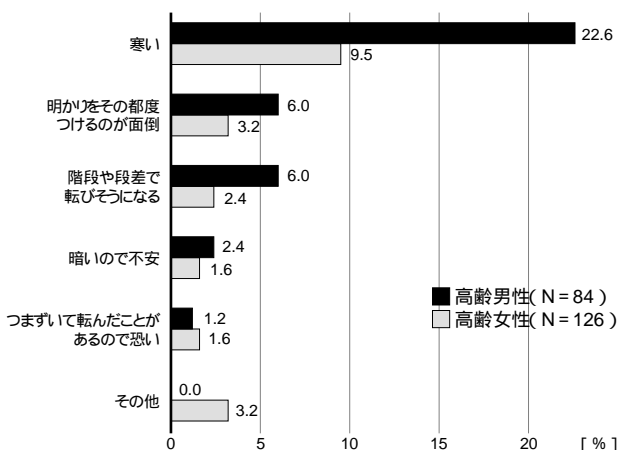
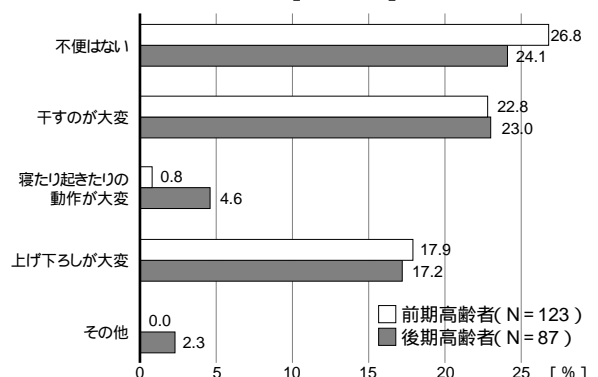


図10 布団使用上の不便さ[年齢別]







# 「ICカード乗車券」体験記 in 香港

あらい さとし  
荒井 聡 (個人賛助会員)

昨年9月、<sup>ホンコン</sup>香港に行ってきました。マイレージプログラムで獲得した無料航空券を利用しての個人旅行。仕事から離れてのんびりすることとともに、もう一つ、この機会にぜひ体験してみたいことがありました。それは、香港の地下鉄で導入されている「非接触型ICカードを使った乗車券システム」。視覚障害者(弱視)であり、外国人である私の目で、その使い勝手を確かめたいということでした。

「ICカード」とは、大量の情報を記憶させておくことができるICを埋め込んだ、ちょうどキャッシュカード大のカードのこと。乗車区間や有効期限を記憶させておけば、定期券として使うことができ、プリペイドカードのように一定のお金の価値を記憶させておけば、乗車する度にそこから料金を差し引いていくことができます。この両方の機能を持たせれば、普段は定期券として、乗り越しをした時にはプリペイドカードとして改札を出る際に自動的に料金を徴収するといった使い方も可能です。

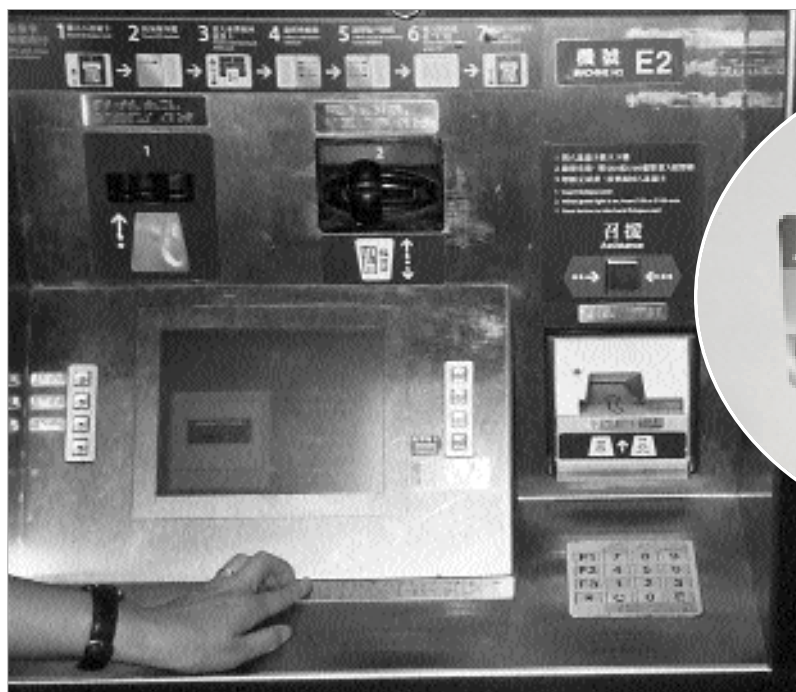
さらに、このカードの便利な点は「非接触型」ですから、いちいち自動改札機に入れることなく、改

札機に取り付けられた専用の「読み取り機」にかざすだけで入出場ができるところにあります。日本でも一部の交通機関ではすでに導入されていますし、JRでも2、3年後には導入される見通しです。

地下鉄、空港特急、バス、フェリーなどで導入

香港の地下鉄では97年から導入され、「八達通(オクトパスカード)」と名づけられています。表面はつるつるで、キャッシュカードのようにエンボス加工で文字が浮き彫りになってはいませんが、裏面の右上に数字が小さく彫られているので、それを手がかりにすれば、触って表裏を確かめることは可能です。現在は地下鉄の全駅の全改札口、1部のバスとフェリー、空港と香港中心部とを結ぶ「空港特急」で利用できるとのこと。香港の地下鉄には定期券がないらしく、もっぱらプリペイドカードとして利用されているようです。

香港の地下鉄は香港盲人協会の働きかけに応える形で、これまでも視覚障害者の利用を考慮した設備を導入してきました。例えば、ホームの縁には転落防止のため、ちょうど日本の誘導ブロックにあた



ロード機の操作部。手のところに点字の説明が付いている(左)と、キャッシュカードと同じ大きさ・厚みの「八達通(オクトパスカード)」

(写真撮影: 荒井 聡)

るものとして、他の部分とは明らかに違うざらざらした足触りのタイルが敷設されています。ホームから出口へ通じる階段の上り口には、「ボン、ボン」というチャイムが常に鳴っています。

その他にも、車いす使用者や大きな荷物を持った人のために幅の広い自動改札（日本のように有人改札ではない）が必ず各改札口に1カ所ずつ設置されていたり、車内放送や駅構内の表示などはすべて広東語と英語を併用するなど、バリアフリー化への取り組みをいくつか見ることができました。

残金が不足すれば、お金を追加チャージ

さて、空港についた我々はまず切符売り場で「オクトパスカード」を購入。値段は大人用が150H\$（香港ドル、1H\$ = 約15円）でそのうち実際に利用できるのは100H\$、残りは保証金でカードを返却する時に返してもらえます。特急列車で中心部へ、いよいよ自動改札機を通ります。

各改札機には、切符を入れるところのそばに上向きに「読み取り機」が付いています。黄色く縁取りされていて一目でわかります。また、他の部分より一段高くなっていますので触って確認することも可能です。読み取り機から5センチくらいのところにカードを近づけると、「ピッ」と鳴って機械が読み取ったことが確認できます。

もし、この時に読み取りがうまくいかなかった場合には「ピピピピピ」という連続音で知らせてくれますし、すでに読み取りが済んでいるのに気がつかずに再度読ませようとすると、「ピー」という他より低い連続音で知らせてくれます。

残高は日本と同様に自動改札機の画面に表示され、券売機の脇にある専用の残高確認機で確認することもできます。読み取らせる際にカードの向きは関係なく、財布やかばんの中に入れてままだでも、読み取り機から5センチくらいのところにカードが近づけば、ちゃんと読み取ってくれました。

「オクトパスカード」を使いこなしてあっちこちと歩き回っていると、そろそろ残高が気になります。そこで、「ロード機」（現金とICカードを入れるとカードの残高をその分増額してくれる機械）を使

ってカードにお金を「チャージ」（お金を払ってカードの残高を増やす）することにしました。

「ロード機」は券売機の脇に置かれていて、大きさはちょうど自動販売機と同じくらい。カラー液晶画面の指示に従い、カードと現金を挿入（この時には、カードは一定の向きに入れる必要があります）、画面に表示される金額を確認して「カード取り出し」のボタンを押せば、チャージ完了です。

現金のほか、自分の銀行口座から直接チャージすることも可能で、その場合にはキャッシュカードを挿入します。キャッシュカードを利用する際に暗証番号や金額を入力するためのテンキーには、1、3、7、9のキーの脇に点字が付いていましたが、5の凸点はありませんでした。操作説明や「オクトパスカード挿入口」などの表示は必ず広東語、英語、ピクトグラムが併記され、点字による操作説明が書かれた金属板も取り付けられていました（ただ、点字は広東語のようで、全然わかりませんでした）。

旅の最終日、地下鉄と特急列車を使って空港へ。「オクトパスカード」もこれで使い収め。ちなみに、オクトパスカードを利用して空港特急と地下鉄を1時間以内に乗り継ぐ場合、地下鉄運賃がタダになる特典があるとか。さらに地下鉄だけに乗車する場合も、カード利用なら通常運賃の1割引になります。

また、改札を出る時にカードの残高が不足していた場合、「保証金」の50H\$から自動的に支払われる仕組みになっているとのことでした。

「小銭を扱わなくて済む便利さ」を実感

今回「オクトパスカード」を使って強く感じたのは、「外国人である我々にとって小銭を扱わずに済むことのなんと便利なことか！」ということ。まして視覚障害者である我々には涙ものの便利さです。自動改札を通る時に「ピッ」という確認音があるだけで、表示が見えなくても安心して自動改札を利用することも実感しました。

香港がすっかり気に入った我々の「オクトパスカード」は、「最後にチャージした日から3年間有効なら絶対また使うよね」と、払い戻しを受けることなく、わが家で次の出番を待つことになりました。

# もっと日本からの情報発信を

## 共用品国際動向調査委員、欧州を視察

99年度共用品国際動向調査の一環として、昨年11月4～13日の10日間、同調査委員会委員の竹川智子さん（ATCエイレスセンター事務局長）と同オブザーバーの加藤完治さん（個人賛助会員）が欧州を訪問、当地の「共用品事情」を視察した。

主な目的は 新たな配慮点の発見、規格化、標準化の動向調査、関係機関の現状視察などで、独・仏・英の3カ国を訪問した。独デュッセルドルフで開催されたREHAインターナショナル（国際福祉機器展）を視察したほか、欧州全域で活動する民間組織、DAN（デザイン・フォー・エイジング・ネットワーク）に参加するドイツ人女性デザイナーのH・ラーメンさん、英国ロイヤル・カレッジ・オブ・アートのR・コールマン氏ら、各国で関係者にインタビューを行った。これらの詳細な内容は、今年度末にまとまる調査報告書に掲載される予定。

今回の視察で一番強く印象に残ったことについて、竹川さんは「モノには文化が反映される。ヨーロッパには、アメリカのユニバーサルデザインとも、日本の共用品とも違う独特のアプローチがある。し

かも、ヨーロッパの中でも、国情、文化によって、実に多様な考え方や手法があることを実感した」。加藤さんは「明確な『共用』という切り口から、企業と消費者が一緒になって具体的に取り組んでいる点で、日本はより積極的だと感じた」と語っている。

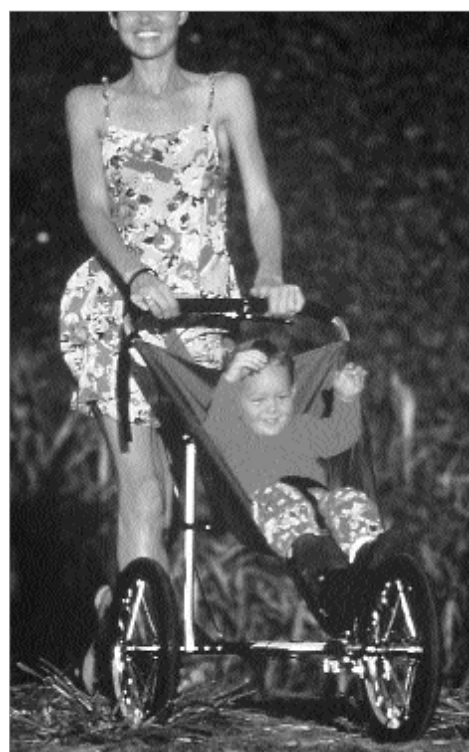
ただ、「これから必要なことは日本からの情報発信。自分たちからもっと積極的にメッセージを伝えていく努力が求められている」と、竹川さん、加藤さんは指摘している。 （高嶋 健夫）



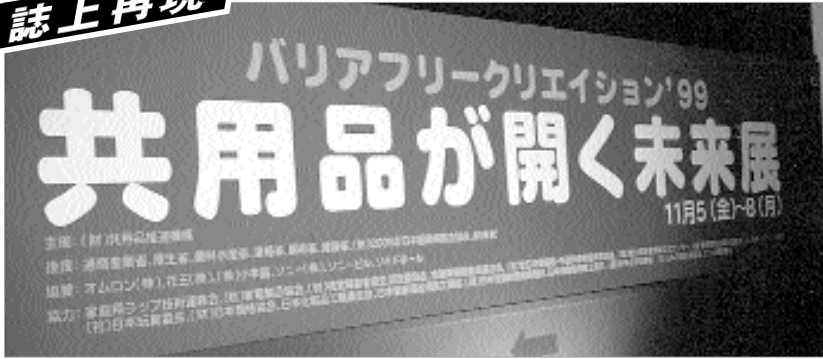
欧州製品の多様な配慮と工夫

大きな液晶画面とダイヤル式のシンプルな操作部を採用した独ボッシュ社製の電子レンジ（部分、左下）、段差にも比較的強い3輪構造の買い物カー（右上）、「ベビージョギング」、つまり子供連れでスポーツを楽しむためのベビーカー（右下）。

（写真提供：DAN）



誌上再現



(財)共用品推進機構が昨年11月5～8日の4日間、東京・銀座ソニービル8階ソミドホールで開いた「共用品が開く未来展～共用品からKyoyo-Hinへ～」期間中約2400人の入場者を集め、アンケート結果を見ても評判は上々だった。財団化後初めての自主展示会の模様を改めて誌上でご案内しよう。(写真・文 高嶋 健夫)



入り口で来場者をお出迎えするのは巨大な「右利き用トランプ」。まず、おなじみのトランプを使って共用品の考え方を説明する(上)。「不便さを知る」コーナーは、障害のある人が日常生活で遭遇するさまざまな「不便さ」と、その解決方法をイラストと現物で紹介(下)。



全部で100点近い共用品を、配慮点の解説パネルとともに展示したコーナーは連日、黒山の人だかり。



花王、TOTO両社の全面協力を得て、シャンプー・リンス容器、ウォシュレット(温水洗浄便座)の開発過程を製品、パネル、試作モデルなどで詳細に解き明かす。初の試みだが、好評だった。



共有品への応用が期待されるハイテクのデモンストレーション・コーナー。人物の顔を認識する技術と、バーコード利用の音声技術を紹介(上)。共有品・共有サービスの発展過程、企業活動との関係性などをパネルで示す(下)。

共有品・共有サービスの先進12事例を表彰した「共有品推進特別賞」のコーナーは、ひととき高い関心を呼んだ(上)。出口近くのアンケートコーナーと書籍販売コーナーもいつもにぎわっていた。中央左にあるのは鴨志田理事長作による「共有ベンチ」の試作モデル(下)。



## 「未来シンポジウム」も超満員

展示会期間中の11月8日には、同じ銀座のリクルートビルで「共有品が開く未来シンポジウム」と名づけた企業向けの有料シンポジウムを開催、定員いっぱいの約300人の受講者が集まった。



通産省医療・福祉機器産業室室長の荒木由季子さんの基調講演(右の写真)に始まり、消費者から見た「不便さ」の所在とその原因を考える第1部のパネルディスカッション、メーカーや流通企業担当者による「共有品ビジネス」の商機と課題を探る第2部のパネルディスカッションまで、パネリストが受講者からの質問に答えるコーナーもあり、熱気あふれ、充実した内容となった。



# 『誰でも楽しめる展示会のあり方』を作成

ユーディット、ホームページでも紹介

情報のユニバーサルデザインを研究しているユーディット(本社横浜市)は、高齢者や障害者にも楽しく、満足できる展示会づくりのためのアイデアやヒントを企業に提供する小冊子『誰でも楽しめる展示会のあり方』を作成した。同社のホームページ(URLは<http://www.udit-jp.com/ud-what>)でも同じものを掲載し、情報を公開している。

この小冊子は、わが国有数のコンピューター関連展示会のCom Japan(コムジャパン)事務局の委託を受けて、「障害のある人や高齢者を含むあらゆる人にアクセスしやすい展示会にするには、どのような配慮や接客サービスが必要か」をコンパクトにまとめたもの。A4判、18ページで、内容は「展示ブース」「接客サービスとマナー」「情報のユニバーサルデザイン」の3部からなっている。

障害者・高齢者の「体験レポート」をサイトで公開

編集・制作に当たっては、インターネット上で障害のある人や高齢者自身の参加を呼びかけ、応募した約30人の意見を反映したほか、共用品推進機構が昨年4月に刊行した『バリアフリーの店と接客』(日本経済新聞社)なども参考にしている。

ユーディットでは、昨年11月に東京・有明の東京

ビッグサイトで開いた「Com Japan 99」の会場での冊子を配布。その際、冊子作りに参加した障害者・高齢者のうち22人が実際に各出展企業のブースに向いて、そのブースの具体的な問題点や改善要望などを指摘しながら、よりアクセスしやすい展示会場づくりを訴えた。ホームページには、その時の「体験レポート」も併せて掲載されている。

同社代表取締役の関根千佳さん(個人賛助会員)によると、例えば、段差の多いブースになっていたA社では「来年は必ず直します」と約束。また、デモンストレーション用のパソコンの高さが車いすでは高すぎる展示になっていた大手企業・B社のブースは説明を聞いて、翌日には改善されたという。

関根さんは「積極的に声を上げていくことは大事なこと。パソコンやインターネットを最も便利に、有効に活用しているのは障害者や高齢者なのに、それらの人たちの不便さを、企業側はまだまだ理解していないのが現状。それだけに、長い目で取り組んでいきたい」と意欲を見せている。

(高嶋 健夫)

問い合わせ先

(株)ユーディット(Eメール: [mail@udit-jp.com](mailto:mail@udit-jp.com)、TEL 045-989-5173、FAX 045-989-5133)

## INAX が銀座に直営タイルショップ

INAXは同社初の直営タイル小売店「INAX TILE SHOP・GINZA」をオープンした。

約3万2000種類ある同社タイル製品の中から、常時500点を販売、店頭にないものも取り寄せる。このほか、DIY(日曜大工)用品やタイルを使ったインテリア製品なども扱う。

設計・施工など住まいに関する相談にも応じるコーナーなどもあり、総合的なアンテナショップとして機能させる狙いだ。(高嶋 健夫)

所在地: 東京都中央区京橋3-6-18

問い合わせ先: 03-5250-6552

### お断りと次号(第5号)のご案内

前号で予告いたしました「弱視者の不便さ調査」の概要紹介は、同調査報告書の刊行が幾分遅くなったことから、3月15日発行の次号に掲載いたします。

次号は、同調査のほか、(財)共用品推進機構と花王(株)情報作成センターが共同で企画・制作し、大反響を呼んでいるビデオ『みんなで跳んだ』などを特集する予定です。ご期待ください。

## 「共用品に関する文献」

後藤 芳一<sup>ごとう よしかず</sup>（個人賛助会員、日本福祉大学兼任講師）

「共用品」と関係が深く、入手しやすく、具体的で参考になるものを選んだ（文中すべて、著編者・書名・出版元・刊行年の順。「共用品推進機構」は前身のE&Cプロジェクトの著作を含む。また、書名の後の、は同様の用語が『インクル』第2号、第3号の本欄に既出であることを示す）。

### 1. 政策

全国社会福祉協議会『完訳解説ADA法 障害をもつアメリカ国民法』（1992年）は米国の先進的な取り組みの理念を伝え、総理府『障害者白書 バリアフリー社会をめざして』（大蔵省印刷局、95年）はわが国の障害者施策を示す。

通産省機械情報産業局『福祉用具産業政策の基本的方向』（通商産業調査会、97年）が共用品を産業政策に位置づけ、同『福祉用具産業政策'98 共用品、知の共有、流通ほか』（同、98年）が分類と市場規模を初めて示し、『福祉用具産業政策'99』（同、99年）は最新の市場を示す。

### 2. 利用者のニーズ

共用品推進機構が分野別に調べてきた。共用品推進機構『朝起きてから夜寝るまでの不便さ調査（視覚障害者アンケート調査報告書）』（日本点字図書館、1993年）に始まり、同『耳の不自由な人たちが感じている朝起きてから夜寝るまでの不便さ調査報告書』（聴力障害者情報文化センター、94年）、同『妊産婦の日常生活・職場における不便さに関する調査研究報告書』（95年）、同『高齢者の交通機関とその周辺での不便さ調査報告書』（97年）、同『車いす使用者の日常生活の不便さに関する調査』（98年）、同『駅の案内・誘導表示の配慮点試案 高齢者の視認性を中心に』（98年）、同『高齢者の家庭内での不便さ調査報告書』（99年）と続く。

共用品推進機構企画・永原達也<sup>みずはら たつや</sup>著『朝子さんの一日』（小学館、93年）は視覚障害者、共用品推進機構『"音"を見たことありますか？』（同、96年）は

聴覚障害者、同『ドラえものの車いすの本』（同、99年）は車いす使用者の生活を絵と物語で紹介する。

### 3. コンセプト

共用品推進機構『「バリアフリー」の商品開発』（日本経済新聞社、1994年）、同『バリアフリーの商品開発2』（同、96年）が経緯と考え方を総合的に示し、同『バリアフリーの店と接客』（同、99年）はそのサービス編になる。東京都立産業技術研究所『技術ガイド「高齢社会のデザイン開発」』（99年）がデザインの配慮点を体系化し、共用品推進機構『共用品白書'99』（99年）が基本的なデータを初めて網羅的に整理した。日比野正己<sup>ひびの まさみ</sup>『図解バリア・フリー百科』（TBSブリタニカ、99年）も情報が多い。

### 4. 具体的な取り組み

共用品は共用品推進機構『共用品展示リスト』（1999年）、容器技術は日本包装技術協会『包装のリサイクル&バリアフリー』（99年）、住居は高齢者住環境研究所『バリアフリー住宅』（オーム社、99年）、公共空間は共用品推進機構『高齢者にわかりやすい駅のサイン計画』（都市文化社、99年）、買い物はタウンモビリティ推進研究会『タウンモビリティと賑わいまちづくり』（学芸出版社、99年）に、それぞれ詳しい。

共用品推進機構『バリアフリーの生活カタログ』（小学館、97年）は鍵になる「人」を、グローバルネットワーク「特集/バリアフリーを巡る産業の動向」=『機械振興』98年9月号所収（機械振興協会）は企業の取り組み例を紹介している。

定期刊行物では、共用品推進機構『インクル』（99年創刊、隔月刊）、アテックインターナショナル『WE'LL（ウイル）』（95年創刊、隔月刊）、ATCエイジレスセンター『ATCエイジレスセンターだより』（96年創刊、月刊）などがある。

# 明けまして おめでとうございます。 本年も引き続き『インクル』を よろしく願っています。

『インクル』は(財)共用品推進機構の機関誌です！

世界で唯一の共用品情報誌『インクル』は(財)共用品推進機構が隔月刊で発行し、個人・法人賛助会員の皆様に郵送でお届けしています。機構では、共用品・共用サービスの普及とバリアフリー社会の実現に共に取り組んでくださる個人・法人賛助会員を募集しています。年会費は、個人が1人1万2000円、法人が1口20万円。入会申し込み・お問い合わせは、事務局(電話03-5280-0020、FAX03-5280-2373)まで、願っています。

『インクル』は共用品・共用サービスの専門情報誌です！

企業や団体などからのニュース提供をお待ちしています。新製品の発売、新サービスの提供開始、新技術の開発、展示会やイベントの開催、常設展示場の開設 共用品・共用サービスに関するニュースリリース、カタログ、パンフレット、広報誌などの資料をお寄せください。ご連絡は、事務局『インクル』編集部まで願っています。

また、広告の出稿もお待ちしています。『インクル』の読者は共用品・共用サービスの普及を担うオピニオン・リーダーです。出広媒体としても積極的にご活用ください。広告料金表は事務局にご用意していますので、お問い合わせください。

『インクル』は消費者と企業をつなぐ架け橋です！

個人からの寄稿・投稿も大歓迎。「バリアフリーサービスの素敵なお店」「心のバリアフリー体験談」「海外ユニバーサルデザイン事情」などなど、個人賛助会員の皆様はもとより、法人賛助会員の読者の方々からのご意見もお待ちしています。宛先は事務局『インクル』編集部まで。お手紙やはがきのほか、FAXや電子メールでも結構です。

作る人と使う人の共用品情報誌

## インクル

第4号

2000(平成12)年1月15日発行

"Incl." vol.2 no.4

©The Kyoyo-Hin Foundation, 2000

隔月刊、奇数月に発行

頒価 1部1000円

視覚障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはTXTファイルのフロッピーディスクを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行 (財)共用品推進機構

郵便番号101-0064

東京都千代田区猿楽町2-5-4 OGAビル8F

電話：03-5280-0020

ファクス：03-5280-2373

Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org

ホームページURL：http://kyoyohin.org/

発行人 鴨志田厚子

事務局 星川 安之

森川 美和

編集長 高嶋 健夫

執筆・協力 荒井 聡

(五十音順) 加藤 完治

小塚 通宏

後藤 芳一

近藤 和子

竹川 智子

芳賀 優子

牧内 智子

山本 明彦

制作 日経BPクリエーティブ

印刷・製本 光写真印刷株(株)

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、(財)共用品推進機構までご連絡ください。

上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。